



復興とみどりの特集

沿岸部再生へ みどりの活用

3.11大震災による津波に襲われ、壊滅的な被害を受けた仙台市の沿岸部。震災前には夏の海水浴をはじめ、釣りやサーフィンなどを楽しむ市民でにぎわう地域でしたが、現在は建物が破壊され、住民が避難したままです。松林などの多くの緑も失われ、かつての面影は全くなくなってしまいました。今後、私たち市民は、この沿岸部の復興と緑の再生にどのように関わっていけばいいのか。津波工学の専門家である仙台市の震災復興検討会議のメンバーでもある東北大学大学院工学研究科の今村文彦教授にお聞きしました。

かつては海岸線に沿って南北に伸びていた仙台市沿岸部の松林。防災林として市民の生活を守るとともに、美しい景観を見せていた。松林の中央には真山堤が見える(2007年6月撮影)

仙台市震災復興計画

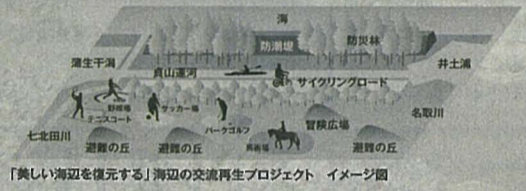
東部海岸に市民交流ゾーン

現在、11月中の策定を目標に進められている仙台市の震災復興計画。その中間案には「100万人の復興プロジェクト」として10の項目が盛り込まれています。その一つが「美しい海辺を復元する」海辺の交流再生プロジェクトです。これは、被災した東部海岸エリアに、津波被害を軽減させる海岸防災林を整備し、美しい海浜景観を再生。仙台市の誇る貴重な自然環境である蒲生干潟や井土浦の再生にも取り組み、多くの市民が海や自然と再び触れ合うことができる魅力的な交流ゾーンを設ける計画です。安全を確保するための防潮堤や防災林を整備することはもちろん、多彩なスポーツ・レクリエーション施設を整え、市民の誰もが訪れたい美しくて楽しい海辺の復元を目指しています。具体的な整備計画については、幅広い市民との協働により取り組むとともに、植樹活動などへの市民参加も検討されていて、その名の通り100万人によるプロジェクトの推進を基本としています。



家族連れなど多くの市民に親しまれた仙台市海岸公園 実験広場。丘陵地を活かした公園で、3.11大震災時には避難場所としても利用された(2010年7月撮影)

- 防災林・蒲生干潟等の再生
- 海岸を訪れる市民の安全確保
- スポーツ・レクリエーション施設の復旧



「美しい海辺を復元する」海辺の交流再生プロジェクト イメージ図

津波被害分析 防災林の再生へ

これまで私たちは宮城県沖地震のレベルを想定し、被害の予測と対策の準備をしてきました。今回はそれを上回るかに超える地震と津波が起き、残念ながら多くの犠牲者を出した結果となりました。自然災害を防ぐことはできませんが、大切な命を失った人々のために、被災地を二度と繰り返さないことを。そのため、仙台市の震災復興検討会議で



真山堤沿いの松林内には遊歩道・サイクリングロードなども整備され、多くの市民に親しまれた(2009年5月撮影)

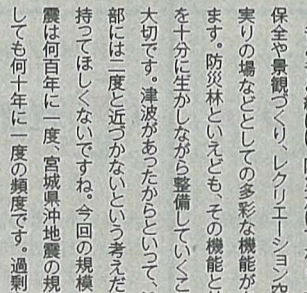
は、特に沿岸部の復興と防災対策についてさまざまな提案をしています。基本的には、防潮堤・防災林・真山堤・道路などを活用した多重制御の防災システムの整備を目指しています。今回の津波で沿岸部の松林がかなり流されましたが、残った松の木を見れば、根が思ったよりも浅いことが分かりました。土壌の層が厚い根も深く張るのですが、地盤が低いところでも根が浅くなり、倒れやすくなっています。今後は土壌をかさ上げし、防潮堤を再生させる必要があります。同時に、防災林の幅も大切です。幅があれば海側の木が倒れても、途中で食い止められる可能性も高くなります。最低でも以前と同じ400メートルはほしいと考えています。

大切なのは リスクとの共生

自然の樹木や地形を生かすのは、防災の基本です。海外でも、マンロープの林や浅瀬の珊瑚礁などを津波対策に活用しています。コンクリートの防波堤などに比べ、自然のものを利用すればコストが抑えられ、メンテナンスコストも少ないというメリットもあります。また、これまでの防災林は松が基本でしたが、松以外の虫などの被害を考慮し、広葉樹を取り入れることも効果的だと考えています。



3.11大震災の津波により、壊滅的な被害を受けた仙台市若林区の沿岸部。生い茂っていた松林も、今は見る影もない(2011年4月撮影)



津波により多くの被害を受けた松林。流された松林の土壌や根の張り方などの調査が進む(2011年6月撮影)

応をするのではなく、平常な生活を取り戻すことが重要です。なお日本の場合、残念ながらどこに任せても自然災害のリスクがあり、完全に安全なところはありません。リスクと共生するというのが大切で、市民が防災林の再生に積極的に関わること、沿岸部の復興も進んでいくのではないかと期待しています。

復興の原動力は 市民の主体的活動

キーワードは「歴史に学ぶ」です。過去に大きな地震や津波があった事実を知ることにも、それを乗り越えてきた知恵と勇気も一緒に学んでいく必要があると思います。例えば、私たちが毎年奉仕してきた祭りなどの行事にも、先人たちの思いや教訓が込められています。今度は、私たちが震災の経験を生かし、新たなライフスタイルと街づくりの確立を進め、将来へと伝えていく番です。阪神淡路大震災でも、市民の主体的な活動が復興の大きな原動力となりました。今こそ、100万都市仙台の力を発揮する時です。大学としても、地域防災実践学や震災復興支援学などの視点から市民の活動を幅広くサポートしていきたいと考えています。



東北大学大学院工学研究科 今村 文彦 教授

仙台市の「生垣づくり助成事業」 被災者支援のために 事業費を増額

仙台市では、杜の都にふさわしい緑豊かな街並みを形成するために、様々な緑化活動を推進しています。今回ご紹介する「生垣づくり助成事業」は、一定の基準を満たす生垣を設置しようとする個人や事業者に対し、植栽費用の一部を助成する事業です。また、ブロック塀を撤去して生垣を設置する場合には、撤去に係る費用も対象となります。この助成は、1978年の宮城県沖地震により、数多くのブロック塀が倒壊したことをきっかけに創設されましたが、3.11大震災においても、ブロック塀被害が多数認められたことから、今年度は事業費を拡大して、対応しています。生垣は美しい街並みの形成や防災のほか、防風や大気浄化などの様々な効果がありますので、積極的にご利用ください。詳しくは、各区役所の街並み形成課までお問い合わせください。なお、仙台市のホームページでも紹介していますので、あわせてご覧ください。<http://www.city.sendai.jp/shizen/midori/info/1107.html>



みどり豊かな街並みをつくる生垣の事例

「生垣づくり助成事業」にも、あしたのみどりキャンペーンが寄附している「百年の杜づくり推進基金」が活用されています。

取材協力/東北大学・仙台市 企画・制作/河北新報社営業本部

あなたの投稿が杜の都「再生」の力に!

2009年・2010年と2年にわたり、杜の都の未来を大きくむかために実施してきた「あしたのみどりキャンペーン」。今年3年目を迎えるキャンペーンは、3.11大震災の被害を受けた、みどりの再生と復興をテーマに実施しております。「杜の都せんだい」の再生へ、心ひとつに。皆さまからの投稿をお待ちしています。

復興のみどり投稿

「杜の都せんだい」のみどりの復興に寄せる思いや、再生のために取り組んでいること、再生のアイデアなどを投稿してください。

1投稿につき100円を寄付

1投稿につき100円が仙台市の百年の杜づくり推進基金に寄付されます。

みどりの再生などに活用

仙台市の緑化推進活動や、震災復興に向けたみどりの再生などに活用されます。

投稿受付: 11/30水まで

投稿および詳しい情報はこちらから!

<http://www.a-midori.jp>

あしたのみどり 検索



※寄附金は公益財団法人、公益社団法人にのみ寄付させていただきます。投稿者の責任はあります。